彩香しの蜘糸商会　縁合わさるは壱千弐百年の幻想

明　綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彩香しの蜘糸商会　縁合わさるは壱千弐百年の幻想

【Ｎコード】

Ｎ７７０９Ｌ

【作者名】

明　綾乃

【あらすじ】

日座霧智也（ひざきりともや）は高校生であり、幻想の忘れられてしまった現代においては数少ないと思われる魔術師である。といってもごく最近まで保護者であり魔術の師でもある魔女に修行ついでにこき使われていた新米。魔女に判を押された魔術の技術資格を頼りにバイトとして紹介されたのは・・・孤独を嫌う蜘蛛の妖怪、土蜘蛛の燕糸蓉湖（えんしようこ）が営む人と妖怪の会社だった。妖怪と魔術士の織り成す企業伝奇小説ここに開幕。

オォプニング壱之幕：蜘糸商会、疾走す

この世に神秘は確かに存在する。
暗闇を嫌う人間が夜の闇に何かを見るのと同じように、月の光が人間の精神に悪影響を及ぼすように
夜は、未だ神秘の支配する時間なのである。

ある科学者は、『我々が観測せざる所では常に常識内の出来事が起きているわけではない』という。
然り、青年日座霧（ひざきり）・智也（ともや）もまた、誰も観察しないであろう夜中の大通りを必死に走っていた。
「あぁ、何でもありだ！！何でもありだよこの世界は！！でも、限度ってものがあるだろぉぉぉぉぉぉ！！！？」
智也は自らを追う存在に講義するように叫ぶ、絶叫する、それと、逃げる。
それ以外に今智也にできる事はなかった。
果たして、彼を追う存在とは如何なるものか、少し事案を巻き戻して確認する必要があるようだ。

「大百足退治…ですか？」
「ちゃーう、大百足の説得や」
…ここより少し先…

先ほども申し上げた事だが、夜は神秘の支配する時間なのである。
失踪、凶悪化、犯罪、超常現象、怪奇現象…総て夜に起こるのは鉄板である。
尤も、最近は昼にまでお化けが出ると言った内容の物語もあるが、

日座霧・智也にとって
昼にまで公園にこんな言語道断な大きさの生き物が巣食っていたら耐えられるわけがないだろうと思っている。
しかし、確かに彼奴等の殆どは昼間行動できる者も多いのだが…それも本当に当たり前なある理由にて。
　しかしそれは今この時を以ってしては全く無駄な思考だと智也は思考を切り替えた。
何故なら、今現在目の前には全長数十メートル、重さにして何千キログラムともありそうな百足がまっすぐこちらを見据えていたのだから。
　大百足…幾千幾億とも言える百足の怨念が一つの存在として凝り固まって生まれる大妖怪である。
「え、えぇとですねぇ、先ほども申し上げましたように人間を食べる必要はないのですよ？
　考えても見てください、確かに百足の妖魅には人間の恐怖を喰らうものも昔はいましたが、それが今のあなたの仕様に合うかどうかは解りませんし…」
　必死に大百足を説得している智也だが、余計な事だった。
『『『『しかし…腹は減っているのだ』』』』
　エコーのかかった怨念の声が、というより怒りに震えた大百足の怒りが、恐怖に震える自らの全身に突き刺さるのを智也は感じた。
　そう大百足が生まれて初めての獲物にようやくありつけるチャンスだったと言うのに、この青年（智也）に話しかけられ
自分の存在に気付いた獲物の女は、悲鳴を上げて全力逃亡してしまったのだから。
　この青銅欄に発生してからまだ何も食べていない大百足にとって、智也はむやみやたらに飼い犬に『待て』と餌の前で言うような…
そんな感じの怒りを向けるべき存在である事は言うまでもない。
　と言うより、智也も薄々感じていたのだ。
――あれ？何でよりによってただの人間の僕が、大百足相手（おんねんのかたまり）に説得

しなきゃなんないんだ？――
『『お前から喰われろ人間んんんんっ！！！！！！！！』』
「やっぱり陽動かあァァァァぁあァぁあああぁぁあァァァァ！！！！」
かくして、夜は人間と妖怪の運動会が始まったわけである。
皮肉にも銅鐸堂はその殆どをビルに包まれた匣の街、パッと見では果てしなくビッグスケールな墓場に見えない事もなかったのである。

つまりは、この世界には妖怪やらなにやら神秘的な存在がちゃんといる世界なのだ。
何を隠そう、自称ただの人間である日座霧・智也本人もまた然り。
非日常と呼ばれるものでさえ、続けば彼等にとっては日常なのである。
その日常がただ一般人から観測されないだけという話。
この機会に、銅鐸堂に住まう魑魅魍魎の日常を覗いてみよう。

場所は公園から離れた住宅街
少年は火事場見物の如く、マンションのベランダからそれを見つめる。
窓はカーテンすら閉じている、中から閉め出されたか、或いはそこに外から侵入し下を監視していたか。
やがて、下の道に大百足と日座霧・智也が通りかかった。
「あれが大百足かぁ。
すっげぇ、初めて見た！　……初めて、だよな？」
自ら言った事に対して後半やや不安げなのは、彼には生まれる前……の記憶というものが無い為である。

「まぁいいや、とりあえず彼を手伝わないとねっ」
そう言うと少年はベランダの塀に立ち、そのまま真っ逆さまに落ちて行った。
するとその姿は闇に飲まれ、一瞬の後に漆黒の大犬の姿がそこにあった。
犬神、蟲術によって生まれ呪いによって生きるこの犬霊は、如何なる因果か少年の魂と同化している。
最早別離不可能の個人として育った彼は妖怪として、道の世界を楽しむために『彼ら』と過ごしているのだ。
大犬、否…少年は二人？の通り過ぎた後に着地するも、その俊敏たる早さで軽々と大百足を追い抜き智也と並走する。
「んと、どうするの、後ろの怒ってる人？
ちなみに俺、テオ。テーオドリヒ・木邑（きむら）、ね
長いからテオでいいよ」
「ぜぇ、ぜぇ…あ、どうも…ってそんな場合じゃなくって！！
ほんと何やってるんだ僕は！！封印儀式は公園って打ち合わせてたのに！！」
智也が泣いて叫ぶのを少年は面白そうに眺めた後、ふと気がついて助言を入れる。
「あ、言い忘れてたけど、この先は行き止まりだよ？
だから」
少年テーオドリヒ…は口で智也を軽々と持ち上げ、塀の上へと連れ出し、
そのまま隣にあった家の屋根へと昇って進路変更し智也を下ろす。
「道案内、必要？」
少年の姿に戻ったテオは、自分の事を指さしてニカッと笑う。
「あ、あぁどうも…！！」
『『『『まぁてぇぇぇぇ人間共おおぉぉ！！！』』』』
家の屋根へとその長い躯を踊りださせた大百足は咆哮を上げた。

時間は深夜、寝静まった住宅街には非日常であるその咆哮を聴く者は殆ど居ない。
しかしその咆哮を聞いたのは、非日常の住人のみではなかった。
「な、何だ今のおぞましい叫び声は！？」
と、銃を構える黒服の男たちもまた然り。
「ねぇボスぅ、もう帰りやしょうよぉ絶対ヤバいですってぇ…いくらライバル企業の情報が欲しいからって
あの『赤羽（あかはね）』に頼むこたぁないとおもいやすぜぇ？」
「ば、バカ言うんじゃねぇやぃ、今更引き下がれるかよぉ…！」
いかにも下っ端と言った風貌の細い仮面の黒服男が、ボスと呼ばれた体格のいい大男の後ろに隠れて震えた声を上げるのに対しボスもまた、震えた声で下っ端に怒鳴りつけるが…
「だ、だってよボスぅ、噂じゃあの赤羽…文字通りバケモノって噂じゃねぇですかい」
「うっるせぇよ！！噂だ噂…それに奴がどんなヤバいジェームズ・ボンドだからって、こっちが契約違反しなけりゃちゃんと…」
ボスの言葉に、下っ端は意外そうにえぇと声を上げる。
「ボス、ちゃんと契約守るんでやすねぇ？
いやこういうシーンの黒服ってすぐ『貴様にやる金などないわ』とか言って銃構えるもんじゃ」
「はぁ！！？莫迦かおめぇ俺は礼儀正しいの！！！」
「あ～…そろそろ始めてもいいんじゃねぇの？」
「「ぎゃァァァあ！！？」」
二人の黒服は、前振りもなしに現れた少年の発言に驚いてその場から飛び上がる。
服装は黒いYシャツに黒いズボンとポニーテールにしてある長い黒髪の黒ずくめ…姿かたちこそ人間とまったく同じに見えるが彼…赤羽もまた妖怪である。

「御二人さん、俺に聞きたい事があるんじゃねぇの？
そんなにビビらなくても、俺は誰にでも何でも情報を売るぜ
相手がやくざでもマフィアでも魔術師でも、バケモノでもな？」
赤羽は記憶喪失者である、それも自分がどんな何の妖怪であるかも知らない程に。
そして、自分は何者なんだと調べ続けてる内にたまたま色んな情報を手にして、折角だしそれで商売をしようと思った。
それに色んな人と情報交換しているうちに、自分の事が分かるんじゃないか…とも考えている。
そんな赤羽もまた、『彼ら』とはよく付き合っていて、よく情報を売っている。
そして、赤羽が求めるものは…金と、情報。
「代わりに、金と一緒にあんたらが知ってる事を、何か一つ教えてくれ」
少年の瞳は、紅く超常に輝いていた。

さて話がずれた、視点を大百足に追われる一行に戻そう。
「ぜぇっ…はぁっ……着いた」
智也とテオは屋根の上を伝ってUターンし、再び元の公園まで戻って来ていた。
『『こんな処にまで戻って来て、何をするつもりかは知らんが…此処は私のテリトリーぞ
此処で私に敵う事なぞ考えるだけ無駄な事っ！！！！』』
「無闇に人を襲ってはいけないよ？」
その言葉とともに、智也達と大百足の間に割って入るように巨大な氷の壁が出現し大百足の進行を阻んだ。
「相手は生まれたばかりならきちんと話せば解るはず。」
氷壁の上に立つのは、氷のように蒼白い和服に身を包んだ少女。

「わたしは君山の雪姫(ゆき)。なお暴れるなら文字通り冷やすよ？」
霊気を放ちつつ氷壁の上で雪女…雪姫は自ら名乗りを上げた。
「あなた達が、最近この町に異常発生する妖を鎮めているという『商会』の人達？」
雪姫が智也達を見やる合間にも、大百足は唸り声を上げている。
『『ぐ、ぐるるるる…　　荒御魂ドライヴ…二次解放……！！！！』』
「まずは落ち着いたところで…っ！！？」
「あぶない！！！！」
『『■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！！！！！！！！』』

怨念を咆哮に乗せて、黒い瘴気に身を包んだ大百足はいともたやすく氷壁を砕いてその向こうへと躍り出た。

雪姫もこの氷壁の硬度には絶対の自信を持っていた、今までの旅の中で如何なる怪異にも砕けえなかった絶対の守護領域が破られたのだからそれは当然ともいえる。

「く…ッ！！」
テオは大急ぎで犬神の姿へと変化し、砕けた氷の破片を渡って雪姫をその背中へ乗せた。
「日座霧さんっ！！！」
テオの叫びとともに、大百足の巨大な顎(あぎと)が智也をとらえようとする。
その顎があわや智也に届こうとしたその時、二つの存在の合間に入る影が素手でその牙を受け留めた。
『『ナニぃい！！？？！？』』
「平賀さん、ありがとうございます」
「しょうがないわね、新人さんだし…」
彼女は平賀(ひらが)・双葉(ふたば)、『彼ら』の最初の構成員の一人である土蜘蛛の娘である。

『頑丈な破壊力』という自信のある平賀は最悪の場合でもとりあえず『日座霧・智也の命を守る』という目的のためにこの公園に待

ちかまえていた。
「その、すいません庇ってもらって…」
いざとなったら智也を庇って大百足の攻撃を食らう役…と言うのも彼女らしいとはいえ、智也はいささかの申し訳なさを感じる。
「貴方はあんなもの食らったら死ぬでしょう？　私は死なない。だから私が食らうの、適材適所よ」
「今はそれより、あの子をどうにかする方が先って事やっと貴方の本領発揮だ、頑張ってよ『魔術師』…日座霧智也さん」
「は、はい！！」
ガシュン！！　と、魔術師と呼ばれた青年…智也はクレイモアのように長い剣のような形をした『判子（はんこ）』の先端を公園の中央に叩きつける。
「星の聖書、起動！！」
智也が叫ぶと、判子の刀身に当たる部位に埋め込まれた１２の文様部分が総て高速回転し、ガチガチと組み合わさっていく。
魔術とは、何らかの代償によって得た魔力（オド）によって、この世のあらゆる奇跡を模倣する非日常の技術である。
星の聖書は儀式の用式、用途、手順をあえて使用者の記憶に徹底的にプログラミングし、あくまで象徴としての１２の星座×１２の文様部分の組み合わせとしてそろえる事で魔力を得られる最低限の儀式の簡略化を実現する。
そう、日座霧智也は神に認められた『魔法使い』でも、彼らのような超常の『幻想種』でもない。
日座霧智也は、科学宗教の横行する現代には限りなく珍しいとされる『魔術師』なのである。
『『魔術師か…！！だが何をしようと無駄だ、あの恩方に頂いたこの力、人間如きに砕けるわけがない！！』』
「砕く必要なんてない、凍らせる必要もない、ただ封じるだけでいい百足は日の光の元には滅多に姿をあらわさない、それは忘れられた荒御魂である名残だから…

ならキミは昼間何処にいる、何処に隠れている？」
智也は再び走り出す、その先にあるのは…公園の中央、影を多く作る台座の上に建てられた女性をかたどった石像。
『『貴様っ…貴様あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』』
大百足は本能で危機を感じとる、そしてその口から無数の怨念の分身である百足を吐いて智也を捕えようとする。
「……。」
また、当然であるようにが平賀が立ちふさがるが、その流れは誰にも止められない。
個である顎ならともかく大質量の流れである百足の群れなど平賀には防げない。
「出番よ、社長」
平賀の呟きとともに、隠れていたように彼女の背後から現れた白い影が、百足の群れにその手をかざした。
糸、シルクのようにきめ細かい糸へとその『流れ』は変質した。

ジ　キン

と、その流れを中央から縦に切り裂いたのは、小さな小さな白い影。
流れの糸のように白くきめ細かい髪をした、本当に小さな少女の手に持つ三鈷剣だった。
「真打ち登場、という感じやったかな？」
ウィンクした白い少女の紫色の瞳は、公園の中央に向いていた。
星の聖書は、確かに石造に向けて判を押していた。
「とふかみえみため、とふかみえみため、はらひたまひきよめたまう！！」
智也の叫びとともに、大百足は時を止めたかのように制止した。
そして一瞬の後に…

『『お、お、おお、おおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！』』

まるでブラックホールの重力圏に入ってしまった惑星のように、その巨体が少女の石像の影に飲みこまれていった。

「封印かあ……人と妖の共存を目指す一族の姫としては複雑な気分」

そう呟く雪姫に歩み寄るのは、白い影の少女。

「にゃっはっは…私達も同じやよ、人と妖の共存を…お互いのかけ橋を目指しとる

ただ、相手が悪かったってだけなんよ…正確には、この街そのものが、かいなぁ？」

「この街が…？」

雪姫の問いに、白い少女は答える。

「銅鐸堂…噂と都市伝説によって変貌した現代日本における魔の都市、第二の『奈良』

この街で最近、怨念の異様に高い妖怪が暴走する言う事件が多なってきとるんよ

奈良戦争、あの悲劇の被害者が今も眠り続けている街…」

白い少女はほんの一瞬だけ、凄く悲しそうな表情をした後にニカっと笑ってみせた。

「私は燕糸（えんし）・蓉子（ようこ）、この街の妖の組織『蜘糸商会（くもいとしょうかい）』を社長として束ねとる土蜘蛛や♪」

「わたしは君山（きみやま）・雪姫（ひめ）。先程のを見たらわかると思うけど、雪女なの。人を護るために動いているの」

雪姫は、智也達と共におずおずと歩いてくる少女…大百足の宿る石像に語りかける。

「ねえ、百足さん？わたしの式になる気は無い？わたしと一緒に人

を護る気は無い？」
大百足は怨念の力を失い、上手くしゃべれなくなったようで…代わりにこくりと、雪姫に頷いた。
雪姫は手袋をしている右の手で握手を求める。
「直接触れると凍らせてしまうかも知れないから」

その一方で、公園に近いビルの上で稲荷寿司を食べながら総てを見ている影が会った。
妖狐、神乃樹（かみのぎ）・右近（うこん）。
「まぁ、あやつが説得を受けるとは思わなかったからこうなることは予想していたがのぉ」
もぐもぐと食べながら呟き全部食べ終わった後、見計らったかのようなタイミングで彼女の懐にある携帯電話が鳴り出した。
それを取り、電はの先の相手と連絡を取り始める。
「…あぁ、今終わったみたいじゃぞ？…ふむ、そのようじゃ…
まぁ、大体予想はしていたがの…処理班はBプランのほうがよいぞこの場合…
ふむ、了解じゃ…それではまたの？」
そういって電話を切った後に、女性は智也を見下ろす。
「…どうやらあの小僧は、あ奴が生まれ変わりじゃのぉ…やれやれ皮肉なもんじゃて」
強い風が吹き一瞬木の葉が周りに舞うと右近の姿は消えていた…

大百足は、恐る恐る雪姫の手袋を握り、握手を交わすと、智也に一粒の小石を渡した。
「…これが、怨念の原因か…」

こくりと、大百足はうなずいた。
「……朱天童子」
呟いたのは社長、蓉子だった。
「まだ、この世界のどこかに居るんか…？」
そう言って、蓉子は遠く空を見上げた。

オォプニング壱之幕：蜘糸商会、疾走す（後書き）

次回：オォプニング弐之幕：スキーズブラズニル航行

「荒御魂ドライヴの研究は進んでおる…完成までそうはかかるまい」

「その仕事、確かに引き受けましたよ」

「な、なんじゃありゃあぁぁぁ！！？」

「こいつは俺の趣味じゃありやせんぜぇ？其処に居たから喰ったんでさぁ」

「奈良の悲劇を無意味にしない為にも…」

「きっとこの船の設計者、掃除機のコードを巻き取る時ビンってなった事ないんだよぉ…」

オォプニング弐之幕：スキーズブラズニル航行

一年前、非観測空間。
通常、物理世界は物理的意識体の観測あってこそ存在が証明される。
しかしその法則も神秘の前では意味を成さない。
それは元より3次元世界の法則から脱している上位次元に存在する神や悪魔、妖怪や魔法使い達もまた然り。
時間や空間を超越し、魔術魔法を行使する彼等にとって何時観測されたか、何時観測したかなどほとんど無意味に等しい。
故に観測されない空間をあえて作り出し、会合を開くことなど彼らにはごく当たり前の事なのである。
「…燕糸蓉子特別指定監査官、只今戻りましたえ」
「メイガス＝モルガーナ測定官、只今もどりましたよ～…っとね」
同時にその空間に足を踏み入れた二人は、お互いに目を合わせる。
メイガスと名乗る女性は首まで隠すロングコートを羽織り漆黒の長い髪を持っている。
「うにゃ、測定官さんに会うんは珍しいなぁ
こちらには同じような御用かいな？」
「そんなもの、ね」
メイガスが応えると、その姿が消えて蓉子だけが真っ黒な空間に残される。
ここでは外見・特徴・名前・声、通常の人格を図る要素であるそれらが意味をなさない
魔術師にも魔法使いにも妖怪にも…ましてや常識内にある科学でさえそれらを変える術は無数に存在する為である。
故に、ここでは何よりその立場こそが存在の証明であり、意味を成すのはその働きである。
平安の世から続く顔のない組織、そしてこれこそが日本の誇る魔

術的総合行政機関『内閣魔術寮』の現場である。
『ではこれより、内閣魔術寮の監査報告会を開会する
燕糸蓉子特別指定監査官、』
威厳ある老人の声に「はいな。」と、応えて蓉子が資料を出して応える。
すると蓉子の前に魔法陣と、その上に立体的な図が展開されていく。
自動筆記…魔術世界の住人達が使うもっとも簡単な奇跡の一つである。
簡易的であるが故に応用が利き、儀式魔術の補助や遠距離での文通に使える他
更に応用を利かせればコンピューターも使わずに声や立体図面という形式で周囲に情報を送る事が出来る。
まさにこの顔のない会合に適した魔術なのである。
蓉子の眼前に展開された立体図面は、日本周辺の海を干上がらせたような形をしており
各地に白い点が文字通り点在し、場所によっては密集している。
これは蓉子が調べ尽くした日本各地の妖怪たちの分布図であった。
「見ての通り、近年の新興宗教から昇華（シフト）した魔術結社の増加に基づいて
妖怪の伝承や存在が日本に限って明るみに出ているのは明白やね、故に一般人達の生活の中にも
少なからず妖怪についての伝承や存在を調べ上げようとする趣味人の増加
それに伴った妖口の増加も、二年前から急増してはります。」
「やはり銅鐸堂の妖怪大量発生（スピリットバースト）が原因か…」
そう言った議員を止めるように蓉子は続ける。
「いいえ、それ以前…奈良戦争のもっとずっと前から奈良で妖怪の目撃例が増加しつつあった事実がありますえ」
「なんと…！！それでは原因は奈良戦争より以前に潜伏していた魔術結社によるものだというのかね？」

「馬鹿な、日本における魔術結社増加はO∴H∴社の魔術資格化制によるものだろう？」
会議場は蓉子以外…いや、確認できる自分以外は全くの闇に覆われている。
しかしてその闇から聞こえる議員達のざわめきはある種の恐怖感を常人ならば思い起こすだろう。
「現に私の封印が未覚醒の魔法使いに解かれる程に、この日本において魔術魔法への阻害因子は弱体化の傾向にあるとみて間違いあらへんでしょう。」
蓉子は自分の胸を撫で下ろし、服の内にある蜘蛛紋の痣を感じる。この顔のない会議にて、蓉子のみがその事情を多くの他者に知られていた。
胸をなでおろす行為は他者に見えないからこそやった事だろう。この事だけは、あまり他人に知られたくない事だったが…蓉子の目的のためならその情報を政府に公開する事もやむなし
蓉子はすなわち、そういう人物…否、妖怪なのである。
「１２００年続いた私の封印さえ弱体化する程の要因…いいや、私以外にも急に過去の力が増したり
新しく妖怪が生まれるケースの急激な増加、そして奈良戦争の勃発…ここから私は、妖怪による人類への反抗勢力があるとみてこれを捜査する権限の要求…
そして、それを征する為の新たな組織を作ることを申告しに来たのですえ
そして、この組織においては薔薇十字騎士団も内閣魔術寮も共生関係を締結し、幻想種たる妖怪と人類の懸け橋としたい
故に私はこの組織の銘を、妖怪と人類の内にある一本の懸け橋…蜘糸商会と名付けますえ」
闇の中、蓉子の紫に妖しく光る瞳はまっすぐと未来を見つめていた。
「奈良の悲劇を無意味にしない為にも…私たちの未来、私たちで決

めさせてもらいますえ！」

魔術師と大百足の追いかけっこから一時間前。
東京の街…交差点における人だかりの中を、まるで幽霊のように誰にもぶつからず機敏に歩きながら赤羽は思い悩む
それは自分の正体、それもそれを探す上でどうしても引っかかる事についてだ。
「何かお悩みですかいなぁ？」
「？　あぁ…社長か」
赤羽は人ごみの中でひときわ小さな…それで尚よく見知った白い髪を見て微笑みかける。
「立ち話も難やし、そこにお気に入りの甘味処があるさかいよらへん？」
にっこりと白い少女…蜘糸商会社長、燕糸蓉子は笑って直ぐそこの喫茶店を指さす。

喫茶店の中は落ち着いた雰囲気で、木製の扇風機が回転する下
赤羽のおごり－当然情報両込み－でケーキを食べる蓉子に半ばあきれ顔で赤羽は問いかける。
「いいのかい？もうすぐ仕事なんだろ、えぇと大百足退治だったっけ？」
「ちゃーう、説得な」
蓉子は腕でバツの字を出して訂正する。
「ハッハハ、そうだったね
封印なんて荒っぽい手段を使うなんて聞いてたからてっきりね」
「封印言うてもな、ちょぉ人間に近い存在にほおりこんで大人しくなってもらうだけやよ
今はそれの準備中、魔術を実践する程精通しとらへん私らはその間

待機
…まぁ有体にいえばめっちゃ暇なんよ♪」
　にははと笑う蓉子に、赤羽は腕を組んで話しかける。
「それじゃあ社長、一つ相談に乗ってくれないかい？」
「にゃ、ええよぉ」
　身振りも素振りも小学3年生のそれだが、蓉子の立ち振る舞いにはどこか気の良い老婆のような安心感を持たせる印象がある。
　情報両のやり取りはあれど、それよりも蓉子独特のこの雰囲気に安心して赤羽は蓉子に相談事を打ち明けられるのだ。
「社長…『タタリ』って知ってる？」
　蓉子の眉が一瞬ピクリと動いた、それでどうやら彼女は知っているのだろうと確信し、またあまり良い思い出ではないことがうかがえた。
「俺の情報だと裏の情報、表の情報どれだけ集めてもはっきりしない部分がある
しょっとしてそれは僕ら妖怪…『幻想種』や魔術師、魔法使いの存在する『非常識の世界』にあるんじゃないかなって思ってさ
その上で幻想種について調べると、必ず引っかかる単語が三つ…『薔薇十字騎士団』『内閣魔術寮』『タタリ』…
あ、いや蜘糸商会の情報も確かに入るけど、そこはよく知ってるし情報はオープンだからね」
　赤羽が慌ててフォローを入れる、蓉子も蓉子で自分の組織がその内に入らなかったのが残念だったのか泪目で赤羽を訴えるように見つめている。
　しかし目薬をことりと机の上に置いた後、蓉子は話を続けた。
「…薔薇十字騎士団はあらゆる魔法現象を武力行使で封印してきた、所謂魔法世界の核弾頭みたいな人達やねぇ
私達妖怪の存在かてそんなにメジャーやあらへんのは、私達が魔法的存在…『幻想種』な訳やさかい
存在している必要最低限でしか通常知られる事はあらへん。

…それは怪異であるが故の本能やからや。
ながいなが～い歴史の中で、そうやって社会の中に溶け込めへんかった怪物は悉く『英雄』に屠られてきたさかいな？
薔薇十字騎士団は要するにそんな英雄ぞろいの傭兵的鎮圧部隊や言う事は、前に言うたよね？」
「あぁ」と頷いた赤羽は知っていた、蓉子の話だけでもなく秋の初頭に騎士団が二人も導入される程の事件が別の街で引き起こされたという事実。
日本国内でのみ彼らの活動は制限されているとは言え、彼等はそれほどの強制力を持った『日常世界の護り手』であるという事だ。
まるで強国の最新兵器によって大量の犠牲が出る事を恐れながら得られた平穏のようである。
「二年前の奈良戦争、あれはそんな現代において唯一…そう、平成唯一の魔法戦争やった
意見の違いから、争っては攻め込み…そして最小限とはいえ犠牲も出た…
その時の敵って何やったと思う？」
赤羽は蓉子の深淵のような紫瞳を見つめながら応える。
「…おんなじ妖怪、だったっけか？」
「そう…幻想種のなかでも、妖怪…学校も試験もなんにも無く、死なずに病気もなんにも無い
お化けの末裔でもある私たち妖怪であっても、意見の対立は起こるんや…」
蓉子は当時と同じ空を見上げる、悪夢の始まりと共に現れた…戦の象徴を思い出しながら。
「きっと、彼等はそんな立場のひと達や…」

そんな喫茶店の会話ときっと同時刻、東京湾…から距離にして5

００ｋｍの海上、漁船『文殊丸』
漁船は嵐に巻き込まれて”偶然”この場に流れ着いていた。
「こんな遠くまで漁船出しちまっていいのかねぇ～ぇ」
「仕方なかろうばい、嵐に流されてナビさ届くとこに居られたこと自体奇跡みたいなものじゃろ」
「船幽霊にならんかった分行幸だわなぁ」
思い思いの事を呟きながら、船員たちは脱力して甲板に座り空を仰ぎ見ていた。
一人は煙草をふかして輪になるように吹いた煙で遊んでいる、その内に空に黒い影を見て呟いた。
「あ、一反木綿」
「ん～？あー確かに、黒いけど一反木綿だぁ…鬼太郎最近見てねぇなぁ」
「あー…妖怪●戦争のオチにはがっかりしたよなぁ～…」
あっあ～、あ～ず～きずっきずっきと暇な猟師の合唱が鳴る漁船の上を通り過ぎようとしたそれは
漁船を見下ろすと…まっすぐそこへと急降下していった。
「ん、んんっ！？なんか降りてくるぞ！？」
「な、なんじゃありゃあぁぁぁ！！？」
それは、長い長い髪の束。
その先端に取り付けられていたのは、生気のない瞳で不気味に笑う少女の体だった。

追いかけっこ終了後、蜘糸商会本社ビル。
そこは奇妙な光景だった。
本来ならばスーツを着た社会人たる人間が勤務しているであろうオフィスで、パソコンのキーをたたくのは一つ目小僧。
小豆洗いが鼻歌を歌いながら社内のコインランドリーを回し社員

のスーツを洗濯し、区切られた畳の上ではちゃぶ台に原稿を広げ座敷童が淡い絵柄の絵本を描いている。
　現代において居場所を追われた妖怪たちに居場所を提供し、互いの交流の礎にすること
それを目的として蜘糸商会は成り立っているのである。
「私を助けてくれてありがとう。えっと…」
「テーオドリヒ木邑、長いからテオで良いよ」
　雪姫は暴走した大百足の攻撃から自身を救ってくれたテオに礼をしてから、再び蓉子と当事者たる魔術師を見やる。
　魔術師、日座霧智也は貰った石に手をかざし、それに通された魔力的な回路を探っていた。
　精密機械の基盤のように魔力を張り巡らされた平面が石の中で多重構造となっており、その奥に禍々しく紅い魔力の塊が渦巻いている…
「タリズマン…それも怨念を手当たり次第に詰め込んだものを使用者の意思によって引き出せるようになってます」
「こんなの、恐らくO∴H∴社…いや、『市国』のデータベース中でも極秘資料の中にしかないような代物だねぇ
しかし通された魔力からして恐らく、制作されたのは一週間そこら前か…」
　智也に続いて話す女性氷乃逆（ひのさか）・桜莉（おうり）、行動派の智也とは違い主にマジックアイテムの製造や研究を専門とするプロフェッショナルである。
「つまり、O∴H∴の資格魔術師達の仕業やない言う事やね…」
　三人の話に、雪姫は説明を求めた。
「どういう事か説明してくれないかな、この街をはじめとして、日本中で最近妖怪の発生率が上がっているとは聞いていたけれど…
こんな大人しい子があそこまで強大な怨念になるなんて奈良戦争前にさえ聞いたことがないよ」
　そう言って雪姫は後ろに従えた大百足を見る。

最早人間の少女とほとんど変わらないその姿には確かに輪郭や魔力の本質として怨念じみた禍々しさがところどころ染み出している。
しかし、百足とは本来住処さえ荒されなければ大人しく、そもそも土地神の代行である本来のむかでであれば
いかに本質として百足達の怨念が集まった存在である大百足とはいえめったに人は襲わない筈なのである。
「確かに、この街では妖怪の発生率は年々上がってきとる…でも、たまにこんないきなり怨念を持って現れる子も増えとるんよ
そう言う子はたいてい、内閣魔術寮の管轄やったんやけど…」
雪姫はその言葉に思わず眉を動かす。
内閣魔術寮とは、古くは平安時代の陰陽寮を前身に持つ日本古来の神秘災害対策機関である。
彼らのやる事は災害としての怨霊、物の怪、バケモノ…妖怪の調伏、薔薇十字騎士団程攻撃的ではないにせよ
そういった怨念の対策といえば、自ずと結果は見えるものだった。
「今回、この子の一件で初めてうちら蜘糸商会が介入の余地を与えられたんや…そして得られたんが、これや」
蓉子の言葉とともに智也が解析した石を見せる。
「つまり…人知れず、それどころか神秘関係者にすら知られずに生まれたばかりの妖怪たちにこれを配ってる、謎の組織がある…ということだね」
桜莉の言葉と共に、蓉子は眉をひそめる。
「…心当たりはただ一つ」
二年前の悲劇、奈良県の上空に突如として現れた災厄と戦乱の象徴…そして、そこから名乗りを上げた悪しき意志を持つ妖怪の首魁を名乗る者の名を…
彼らの組織の名を…
「朱天童子（しゅてんどうじ）と、世界に災いを与える幻想（あやかし）の者達……『タタリ』…」

同時刻、どこかの船のメインデッキ。
幾重もの材木が組み合わさって構成された甲板は出来損ないのＳＦ映画のような感覚を呼ぶが
これは確かに『船』の甲板として機能している。
面舵前の玉座に胡坐を書いて座り込んでいるのは朱(あか)い着物の少女。
その髪は健康な血のように朱く、流れる血のように長い。
そこを除いて奇妙なことに、その少女は誰かの面影を連想させるのである。
「して、新入りの回収に手間取っているようじゃが…やはり穏健派の動きも起こっておるとみて間違いなさそうじゃな」
朱い少女の眼前には自動筆記によって編まれた立体映像の碁盤
その上には白と黒ではなく、白と朱色の駒が互いに数個ずつ置かれている。
やがて玉座の後ろに位置する襖が開き、振り返った玉座の前に４人の少年少女が姿を現した。
「旧き時代の陛下、１２００と2年間の休息より目覚められた事…先ずはお祝い申し上げます」
その内の一人、重力に反して地につかず揺らめく長い長い黒髪をした男が仰々しく道化るような仕草で頭を垂れる。
その男の体は、先刻漁船の上で呑気にも映画の結末を語らっていた漁師のものだった。
しかしその言葉の端々には皮肉めいたニュアンスが感じられ、朱い少女は眉を動かす。
「毛狼(もうろう)…喰らった獲物の中身に入ってとり憑き、異次元に巣食う事で他者の目を欺く怪異じゃったな…」
「俺のような卑しき物の怪の事まで知っていただいているとは、いやはや光栄の極み」
毛狼と呼ばれた男…否、その頭部からはみ出た怪異の一部にイヌ科の動物のような耳が生える。
朱い少女は興味が無いようにフンと鼻を鳴らして地図に目を通す。

「忌々しき時代よ、人の子供の常識は大きく我ら超常の者から離れ、たった一度の悲鳴は大いなる観測となって我らをかき消す程の力を持った…」
この世界において、妖怪の存在とはひどくあいまいだ。
妖怪は人間の信仰や常識が形になった存在であるがゆえに、多くの人間…場所が悪ければたった一人の人間がそれを観測し『あり得ない』と否定すれば
その言葉が強大な力となって妖怪の存在をかき消してしまう。
「しかし、それでもまだ我らには道がある、方法がある…しかしてそれを阻もうとする愚昧な輩がいる。
頃合いを見て、潰すのが得策じゃろうな…と、その前に」ヒュ…
「であれば、俺が…」シュパン！！
言いかけたところで、毛狼の『人間の躯』が縦一閃に裂ける。
それは朱い少女がいつの間にか振り上げた片腕によるものなのだろう、彼女の腕は高くふり上げられ、黒い血に汚れていた。
「やれやれ、やたら殺気をこめて睨んでくると思ったら…
この躯（こいつ）は俺の趣味じゃありやせんぜぇ？腹が減った時其処に居たから喰ったんでさぁ」
ゲッゲッゲ・・・と、下卑た笑みを浮かべてドシャリと崩れた死体…その髪から、物理法則を無視したかのようにセーラー服を着た高校生ほどの少女の躯があらわれて
『毛狼』はぐちゅぉ…と脱皮するように男の躯を脱ぎ棄てた。
「好みの男でなかったならば、アンタ様の好みでも今後の参考に教えてくれませんかねぇ」
「控えよ痴れ者が。妄が求めるは共に志を持った同士のみ、本能（イド）の怪物に用はない
控えよ毛狼、いずれ妄の家畜となる者共に無許可の手出しをするな？」
毛狼の『女の体』の頬に嫌な汗が流れる…今、あえて急所を外したのだこの『鬼』は。

『次は殺す』そう言う意味に捕えても間違いはないであろう殺気を感じながら、毛狼は首を垂れる。
「失礼いたしやした…次の『食事』は、アンタ様の指示する場所で…そう言う事で？」
「そうじゃの…『喰らったものを着る』お主の芸は少なからず使えそうじゃ…なれば、お前の次なる食事は此処じゃ」
今度こそ敬意を込めて貰った事に満足したのか、やや殺気の薄れた朱い少女は自動筆記をさらに拡大し福島は川上川渓谷へと視点を移す。
「ここに人間どもが建てようとしておる、魔力供給用の水車小屋…はつでんしょとかだむとか言うたのかの？
その建設現場へ赴き、そこな住む蜘妖の『たが』を外してこい」
そう言いながら朱い少女は毛狼に二つの小石を投げてよこす。
「これは…？」
「妄が切り札よ…怨念を込め呪法にて『起動（いぐにっしょん）』する荒御魂の宝玉…荒御魂ドライヴとでも呼ぼうか？」
その石の内に詰め込まれたおぞましい怨念の塊を感じ、毛狼は少女の顔にニタァと醜悪な笑顔を張り付ける。
「一つはお主の、もう一つは…その蜘妖のものじゃ、よく考えて扱えよ？」
「謹んでその命を頂戴いたしましょう我が君にして人間、鬼の王にして魔法使い…『朱天童子』様」
傅いて首を垂れる毛狼に、赤い少女朱天童子は満足そうな笑みを浮かべ立ち上がる。
「『タタリ』本戦スキーズブラズニルはこれより川上川渓谷上空へと進路を取る！！！！」
2年ぶりの本格的な活動じゃ、錨を上げい！！！！！」
朱天童子の号令と同時に、館内がゴゴン！！と鳴動する。
そしてそれと同時に館内中から悪鬼羅刹の歓喜の声が上がり、繊維が高揚していくのを館内のだれもが感じていた。

朱天童子はそんな中ふっと空を見下ろし、懐かしき好敵手に語りかける。
「邪魔者はお前なのじゃろう？燕糸蓉子…人間どもに媚び諂う恥さらしの裏切り者め…
いいじゃろう、荒御魂ドライヴの研究は進んでおる…完成まではそうはかかるまい
ならば数の勝負じゃ…勝利するは我等の野望か主らの希望か…受けて立って魅せろぉぉぉぉぉおおおおお！！！！！！
くかかかかかかかかかかかかかかかかかか！！！！！」
化け物どもの鬨の声と、鬼の姫の狂った笑い声が空高く鳴り響く・・
人類の目の届かない地上数千メートルの超高空で、朱天童子の『武器』である巨大浮遊戦艦スキーズブラズニルは
一路大阪の方角へと進路を取って、錨のつながれたアンカーを巻き上げ始めた。

その一方…ガチン！！といううけたたたましい金属音と共に完全に巻き上げられたスキーズブラズニルのアンカー
その先にぶら下がり、それで尚奇跡的にアンカーに巻き込まれず生きている少女の姿があった。
そしてぐったりとしたその少女にしがみつき、衝撃で痛む頭を振る一匹のトカゲのような幻想生物
二人が文句のようにつぶやく…
「あいたた…何考えてるんだこの船の設計者…」
「きっとこの船の設計者、掃除機のコードを巻き取る時ビンってなった事ないんだよぉ…」

大阪市、どこかの歴史ありげな茶屋にて。
団子を頬張る一人の青年、その後ろに座り顔を見せず語りかける黒服の男。
「碓氷・総一郎殿とお見受けする」
黒服の男の言葉に、青年は振り返らず「はい」と答える。
丁重な返答だが、決して黒服の男の下に属しているわけではないのだろう
背中合わせのその返答には一切の隙がなく、男は一瞬のすきを見せれば刈り取られてしまうような言い知れぬ不安にいやな汗を垂らす。
「ダムの建設現場に現地の妖怪が住み着いていて、軽度の幻想公害を及ぼしているとの報告がある
今回の依頼主はそのダムの所有者、依頼料は追って指定の口座に振り込むとのことだ…前金はいるか？」
「いえいえ、私にはこの団子を頂くだけのお金と…この苛立ちを晴らせる戦場さえあれば十分ですよ」
男の言葉に丁寧に答える青年の言葉には、隠しきれない狂気が見え隠れしていた。
「相手は魔術寮換算でＢ－クラスの蟲妖、滝主蜘蛛（タキノヌシクモ）だが…引き受けていただけるか？」
「その仕事、確かに引き受けましたよ」
振り向いた青年の穏やかな表情の下には、今か今かと解き放たれるのを待ち構える獣の殺気が溢れかえっていた。

オォプニング弐之幕：スキーズブラズニル航行（後書き）

次回：第壱章壱之幕／あのよろし壱之幕：滝主蜘蛛／蜘糸商会

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7709l/

彩香しの蜘糸商会　縁合わさるは壱千弐百年の幻想

2010年12月3日12時18分発行